

九州縄文時代における資源利用技術の研究

板倉， 有大

<https://hdl.handle.net/2324/7182258>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (学術) , 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名 : 板倉 有大

論文名 : 九州縄文時代における資源利用技術の研究

区 分 : 乙

論文内容の要旨

本論は、九州地方の縄文時代前期から晩期にかけての、磨製石斧、打製石斧、縦長剥片石器などの石器と、遺跡立地を分析し、当該期の資源利用様式や居住様式を復元するものである。資源利用様式の復元にあたっては、(1) 自然遺物に比べて資料数を多く確保できる資源利用技術としての石器と遺跡立地を分析対象とすることで、分析対象の偏りを低減させる。(2) 遺跡出土資料の分析だけでは、縄文人の資源利用行動は推定できないことを再認識し、古環境復元研究、生態人類学（民族誌）、実験研究などの成果を積極的に援用する。という考えのもとに研究を進める（図1）。調査対象地域は、大陸農耕文化の受容地である北部九州地域を含む九州本島地域としている。また、調査対象時期は、完新世最温暖期以降の気候変動期および沖積低地の形成期に相当する縄文時代前期から晩期（約7,500～2,700年BP）としている。

本論では、生態人類学や人間行動生態学の研究成果（最適採食理論など）を援用して、縄文人の食料利用を以下のようにモデル化する。縄文人たちの野生食料の採捕の場では様々な選択基準が想定され、その結果として幅広い食料リストが存在する（食料採捕選択モデル）。同様に、野生食料の管理の場でも、様々な選択基準（主にコスト面）が想定され、使用可能な技術や社会関係を前提として、幅広い食料が管理の対象となる（食料管理選択モデル。図2）。これらのモデルにもとづいて、先行研究における食料利用の説明を再検討し、野生食料に対する採捕圧、食料化コスト、ヒトと植物の「結びつき」、遺跡に残りにくいイネ科植物やイモ類利用、植物利用技術と経済・社会類型の階層的関係などの問題（観点）を抽出している。居住集団の資源利用様式が直接的に関係する居住様式については、人口増加、植物・動物利用、社会複雑化の問題（観点）が、縄文時代の居住様式と経済・社会システムの関係性を説明する上で重要であると整理する。本論は、人間側と資源側の双方の変数の影響を受け続けるシステムとして縄文社会を捉える（図3）。このような理論上の観点を、遺跡出土資料の分析から検討し、縄文時代の資源

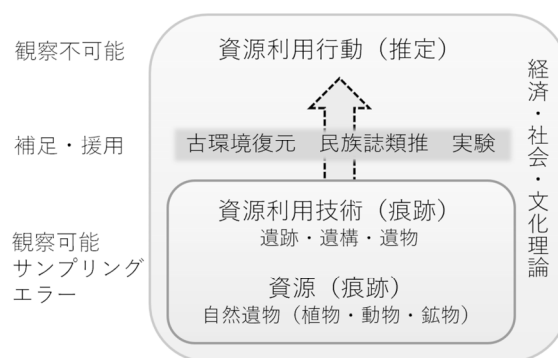


図1 考古学における資源利用研究

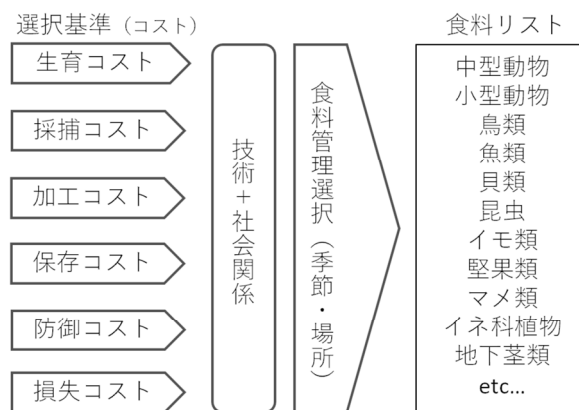


図2 食料管理選択モデル（コスト面）

利用とその社会の総合的な説明を試みることを本論の目的としている。

縄文人たちの資源利用行動を考古学的に復元する方法として石器分析と遺跡立地分析を行っている。本論では、対象とする石器器種の機能・用途を民族誌、実験などの研究成果、最適化理論にもとづく想定などをもとに復元し、実資料の諸属性（石材、形態、サイズ、使用痕）からその妥当性を検証する方法を採用している（石器性能分析）。このようにして把握された器種セットの地域的変異や通時的变化（動態）を、その石器を用いた資源利用様式の様態の一部を示すと解釈する（石器器種モデルの構築）。この石器器種モデルの妥当性を確かめ、かつ説明の範囲を広げるために、関連する情報（古環境データ、遺構、動物遺存体、その他石器の様相）との関係性を検討している（石器モデルの構築）。また、博多湾沿岸地域の縄文時代前期から晩期にかけての遺跡立地変遷を把握し、石器モデルによる説明との対比を行っている（資源利用モデルの構築）。

本分析が復元する九州縄文時代前期以降の居住様式と資源利用様式の変化は以下のとおりである。

(A) 前期の沿岸部を中心とした移動性の高い居住と資源利用様式から、中期の内陸部を中心とした移動性の高い居住と資源利用様式への変化。

(B) 後期前葉の沿岸部と内陸部における定住的な居住と資源利用様式への変化。地下部資源および小型動物資源利用の未発達。

(C-1) 九州中部以北；後期中・後葉、内陸部を中心とした定住的な居住と資源利用様式への変化。地下部資源利用の発達。博多湾沿岸地域の小型動物資源利用の発達。

(C-2) 九州南部；後期中葉、市来式土器文化の特異性。後期後葉、地下部資源利用の発達（九州中部以北とのタイムラグ）。

(D-1) 九州中部以北；晩期前・中葉、博多湾沿岸地域の沖積低地と内陸部におけるやや移動性の高い居住と資源利用様式への変化。小型動物資源利用の衰退と継続。

(D-2) 九州南部；晩期、地下部資源利用の発達と特異性。

上記の変化は、下記の自然環境変化の影響を受けている。

(X) 前期の海進最盛期（完新世最温暖期の海水準上昇）における内湾環境の形成

(Y) その後の海退（海水準低下および冷涼湿潤化に伴う沖積作用促進）における内湾環境の変質

(Z) 後期以降の沖積低地環境の形成（氾濫原の生物量増加）

このモデルは、後期以降の森林内や沖積低地における陽地性植物や湿地性植物と縄文人たちの「結びつき」の契機や、集団間ネットワークの安定化、後期中葉以降の沖積低地における野生食料の集約的利用、後期後葉の環境収容力の頭打ち、といった後期社会に対する新しい観点を提供している。また、博多湾沿岸地域においては、後期中葉から後葉にかけての海岸砂丘の形成と後背湿地の発達が、採集経済システムから水田稲作経済システム（弥生文化）に移行するトリガーになったと想定する。後期以降の九州南北の地域差も、地形の違いにもとづく沖積低地の形成度合いの差異に起因すると思われる。

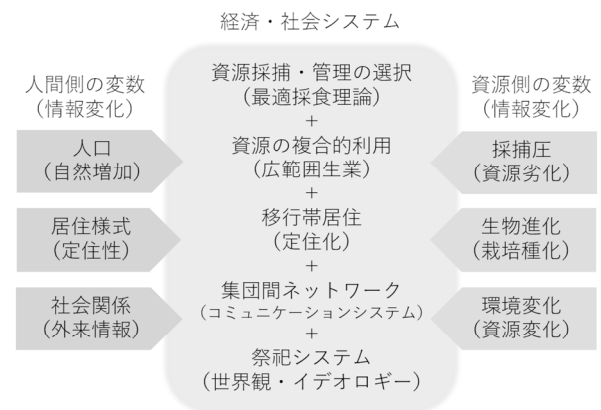


図3 縄文時代の経済・社会システム